# 文字無き古代日本の実現

## ―『古事記伝』の『古事記』序の読みを中心に―

裴 寛 紋*

（e-mail ： ansll@hotmail.com）

目　次

はじめに
１．「言」への問い
２．「古語」を求めて
３．文字無き世界の「言」と「心」
４．「事」として実現する世界
おわりに

## はじめに

抑意と事と言とは、みな相称へる物にして、上代は、意も事も言も上代、後代は、意も事も言も後代、漢国は、意も事も言も漢国なるを、書紀は、後代の意をもて、上代の事を記し、漢国の言を以、皇国の意を記されたる故に、あひかなはざること多かるを、此記（＝『古事記』）は、いさゝかもさかしらを加へずて、古より云伝たるまゝに記されたれば、その意も事も言も相称て皆上代の実なり、是もはら古の語言を主としたるが故ぞかし、（『古事記伝』一之巻・古記典等総論、9・6）[1)]

いわゆる「意」＝「事」＝「言」の図式で表現される三位一体の回復への志向を語る、本居宣長の有名な言説である。『古事記伝』全体の総論として宣長の自ら明言したこの立場は、後に「言と事と心とは其さま相かなへるものなれば」（『宇比山踏』1・1

＊ 韓国外国語大学校 講師 古典文学／国学思想

1) 本居宣長の著作の引用は、『本居宣長全集』筑摩書房により巻数・頁数を示す。なお、原文の割注及び振り仮名・送り仮名は適宜省略し、漢字表記を改める。以下同じ。

www.kci.go.kr

8) と繰り返され、改めて「言」＝「事」＝「心」の図式を作る。いずれにせよ、世界をこのようにとらえた宣長にとって『古事記』は「古の語言」を伝える真の書物としてあり、そこで「古意」を明らかにする「古言」を求め、宣長が『古事記』注釈に向かったことは容易に言えるだろう。

さて、こうした理解は他ならぬ、小林秀雄の宣長批評の要点でもあった。戦後日本の多くの読者が彼の批評書に魅了したことは周知の事実であるが、彼の晩年の最大の仕事であった『本居宣長』[2]もたちまち増刷を重ねるなど、当時としては大きな反響を引き起こした。にもかかわらず、この本が学問的に振り返されることは今まであまりなかった。評価どころか、逆にそれは宣長の伝記でも宣長の思想研究を本格的に目指した論文でもなく、単なる印象批評に過ぎないと、言及そのものを避けつづけてきたのである。

本稿では、あえて最初にここに注目したい。小林の批評がとりわけ言語への視点を導入し、その問いかけに徹底したという意味では[3]、当面の宣長理解にあたって示唆に富む批評であったと考えられるからである。ここでは小林が触れた宣長の言語認識の問題を一つの手がかりにして、宣長における『古事記』注釈の営みの意味を探ることとする。今回、論旨の展開において中心になるのは、『古事記伝』の『古事記』序の読みにかかわる部分に止まるが、そのことは『古事記伝』全体への展望を示すための出発点となるだろう。

## 1．「言」への問い

批評家小林秀雄の誕生は、一般に、1929年の「様々なる意匠」と言われている。その翌年から、彼は『文芸春秋』の時評を担当する批評家として、正式に文壇にデビューした。と同時に、小林秀雄論というべきものも始まるが、研究者のほとんどが指摘しているのは、「自意識」「自覚」「直覚」「直知」「感想」「内観」などに代表される彼の批評のキーワードである[4]。すなわち、批評の対象を作者と自分との同化によって語り直そ

---

2) 小林秀雄の「本居宣長」は1965年6月から1976年12月まで、計64回にわたって『新潮』に連載となり、翌年、最終章を7月に脱稿し、10月には単行本として世に出る。さらに1979年、『新潮』の1・2月号と、翌年の2・3・5・6月号と6回に及んで『本居宣長補記』が別巻として加わり、連載だけで11年余り、全体としては約15年間を費やした。ここで小林秀雄『本居宣長』の引用は『小林秀雄全作品27 本居宣長 上・下』新潮社により章数・頁数を示す。

3) 早くも言語観から小林を論じたものに、たとえば、長編評伝として江藤淳（1961）『小林秀雄』講談社があり、江藤は個別論文として同（1983・4）「言葉と小林秀雄」『新潮』80・5をも書いている。他にも小林の言語観へ注目した研究者は数多いが、とくに大江健三郎（1978）『小説の方法』岩波書店がその書き出しに『本居宣長』の一節を用いてロシア・フォルマリズムに触れたのは有名である。

4) 網羅的な研究史の整理は到底できず、代表的雑誌の特集などを中心に小林秀雄研究史の系譜を調べる作業に止まる。ただ1970年代、多くの思想誌及び国文学雑誌が特集を組んで小林を読む問題を

www.kci.go.kr

うとする自己同一化の方法、後に小林自身は「演奏」と呼んだり一種の「創作」と呼んだりした方法こそ、その批評の第一の特徴であったとまとめることができる。

当然、『本居宣長』においても、こうした小林批評の基本的な態度はいたるところで確認される。というより、小林自身、最初からこのテキストに臨む立場について、次のように明言している。

> 宣長の思想の一貫性を保証していたものは、彼の生きた個性の持続性にあったに相違ないという事、これは、宣長の著作の在りのままの姿から、私が、直接感受しているところだ。……実際に存在したのは、自分はこのように考へるという、宣長の肉声だけである。（『本居宣長』2・40）

冒頭に近いこともあってしばしば引かれる箇所であるが、ここで小林はあくまで宣長の「肉声」を聞いたという宣言の下、この後、自分の文書に引用文が多くなる点などについても積極的に断っておく[5]。果たして、ここまで小林が「直接感受」したと強調する宣長の思想とは具体的に何を指すのであろうか。続いては、主に『古事記伝』にかかわる箇所を取り上げ、まず小林の読んでいる『古事記伝』に焦点を当ててみる。

> 「古事記」という対象は、程よい距離を置いて冷静に調査されたのではない。彼は「古事記」のうちにして、これと合体していた。（『本居宣長』28・321）
>
> 私の仕事の根本は、何度くり返して言ってもいいが、宣長の遺した原文の訓詁にあるので、彼の考えの新解釈など企てているのではないからだ。（『本居宣長』22・253）

小林に言わせると、『古事記伝』は宣長が『古事記』と「合体」した結果であって、決して『古事記』の解釈を試みたものではない。こうして批評の対象との一体化を語る前者の見解は、ちょうど自分の批評が「新解釈」ではないことを主張している後者の小林の姿勢に対応する。つまり、宣長の著作に走っている自分と、『古事記』注釈に没頭していた宣長とを、小林は全く同じ構図のなかに置くのである。

同様に、その宣長が辿りついたところは『古事記』の撰者安万侶の「肉声」であったとする、次の構図が、なお見て取れる。

> 註のくだくだしさには、何か尋常でないものがある。それが「序」を読む宣長の波立つ

---

投げかけていたことは指摘できる。

5) 作品中に利用された引用文の長さと夥しい量は、小林批評のレトリック的な特徴としてよく指摘される点である。直接引用のみならず、挿入句や敷衍による叙述などの間接引用をも考慮すれば、実際上の引用の割合はより高くなる。

www.kci.go.kr

心と結んでいる事を、はっきり感じ取ろうと努めてもいいだろう。言ってみれば、宣長が「序」の漢文体のこの部分に聞き別けたのは、安万侶の肉声だったのだ。（『本居宣長』28・315）

宣長が、「古事記」の研究を、「これぞ大御国の学問の本なりける」と書いているのを読んで、彼の激しい喜びが感じられないようでは、仕方がないであろう。彼にとって、「古事記」とは、吟味すべき単なる史料でもなかったし、何かに導き、何かを証する文献でもなかった。そっくりそのままが、古人の語りかけてくるのが直かに感じられる、その古人の「言語のさま」であった。耳を澄まし、しっかりと聞こうとする宣長の張りつめた期待に、「古事記序」の文が応じたのであった。（『本居宣長』29・327）

小林自身がそうであったように、『古事記』を読む宣長には安万侶の語りが「直かに感じられる」とする。そして、その読みから得られた宣長の『古事記』論とは、小林の指摘通り、全的に『古事記』序の存在に依拠している。小林の用語で言い直せば、安万侶の「肉声」から宣長がまさに「聞き別けた」何かがそこにはあったのである。では、『古事記伝』において宣長は『古事記』序をいかに読んでいるのか、節を改めて確かめることとする。

## 2．「古語」を求めて

序は、『古事記』成立の経緯を記す、唯一の資料である。

それによると、『古事記』の編纂は、天武天皇の「阿礼に勅語して、帝皇日継と先代旧辞とを誦み習はしめたまひき」（『古事記』上巻・序、23）[6]とある発意から始まった。ところが、天武天皇の崩御によりその完成までには至らず、後の元明天皇が再び「稗田阿礼が誦める勅語の旧辞を撰ひ録して献上れ」（『古事記』上巻・序、24）と命じたのを、安万侶が果たしたとある。

この序を宣長がいかに読んでいるのかは、『古事記伝』二之巻に詳しく表れている。次の引用は、上記に挙げた二ヶ所の部分に付された注釈にあたる。

勅語は、天皇の大御口づから詔ひ属るなり、かくて此はなほ殊なる意も有べきか、其は下にいふべし、令誦習とは、旧記の本をはなれて、そらに誦うかべて、其語をしばしば口なれしむるをいふなり、抑直に書には撰録しめずして、先かく人の口に移して、つらつら誦習はしめ賜ふは、語を重みしたまふが故なり、（『古事記伝』二之巻、9・72-73）

6) 『古事記』の引用は新編日本古典文学全集1『古事記』の読下しにより、『日本書紀』の場合は日本古典文学大系67・68『日本書紀 上・下』により頁数を示す。

www.kci.go.kr

こゝの文のさまを思ふに、阿礼此時なほ存在りと見えたり、かくて彼清御原朝御世に、誦習ひおきつる帝紀旧辞は、此人の口にのこれるを、今安万侶朝臣に詔命仰せて、撰録しめ賜ふなり、さて此には旧辞とのみ云て、帝紀をいはざるは、旧辞にこめて文を省けるなり、……此勅語は、唯に此事を詔ひ属しのみにはあらずて、彼天皇の大御口づから、此旧辞を諷誦坐て、其を阿礼に聴取しめて、諷誦坐大御言のまゝを、誦うつし習はしめ賜へるにもあるべし、もし然るにては、此記は本彼清御原宮御宇天皇の、可畏くも大御親撰びたまひ定め賜ひ、誦たまひ唱へ賜へる古語にしあれば、世にたぐひもなく、いとも貴き御典にぞありける、（『古事記伝』二之巻、9・74-75）

前項に挙げた、天武天皇の「勅語」に対する注はそこに「なほ殊なる意」のあることを仄めかしたのだが、そのことは後項に挙げた、元明天皇の命に見える「阿礼が誦める勅語の旧辞」の「勅語」を指している。すなわち、天武天皇は単に阿礼に「誦習」を命じただけではなく、天皇自ら撰定した「旧辞」を阿礼に聴かせたのであった、と宣長は解している。宣長にしたがえば、全ては「語」を重んじたからのことであり、「旧記の本をはなれて」それを「語」に戻したのは、まさに天武天皇なのである。

一方、阿礼の存在も勿論欠かせない。実際に『古事記』撰録が果たされるのは元明天皇の時代である以上、天武天皇から直に受けた「古語」が伝わるためには、阿礼の「誦習」を経由し、「此人の口にのこれる」必要があったのである。だからこそ、阿礼は何歳であろうが、どうしてもこの時代まで生きていなければならない。引用において割注はほぼ割愛したが、宣長がわざわざ阿礼の歳を計算して注記しておいた理由も、このような文脈から考えられる。

そうして、実に二代にわたって完成した『古事記』が今に伝わる驚きの事実に対する喜びとめでたさを、上記の引用に続いて、

然るは御世かはりて後、彼御志紹坐御挙のなからましかば、さばかり貴き古語も、阿礼が命ともろともに亡はてなましを、歎きかもおむかしきかも、天神国神の霊幸ひ坐て、和銅の大御代に此御撰録ありて、今の現に此御典の伝はり来つることよ、物学びせむ人頂に捧持て、天神国神、又二御代の天皇尊、又稗田老翁、太朝臣の恩頼を莫忘そね、（『古事記伝』二之巻、9・75）

と語っている[7]。『古事記』成立に深いかかわりをもつ天武天皇と元明天皇、また阿礼と

7) 因みに、割注には、その二代の天皇の元年がいずれも申年であって、宣長自身が『古事記伝』を書き始めた明和元年もちょうど申年であったという不思議な縁についてまで触れている。「【記の本を起し賜ひし天武天皇の元年、申年なりしに、其撰録れし元明天皇の和銅元年も申年なり、かくておほけなく宣長此伝を著し初むる今の大御代の明和元年しも、又申年にあたれることをなむ、窃に奇しみ思ふ、】」（『古事記伝』二之巻、9・75）

www.kci.go.kr

安万侶を並列してはいるが、なかでも天武天皇の「勅語」と阿礼の「誦習」、この二点を宣長が最も重要視したことは先に述べた通りである。

宣長にとって「勅語」と「誦習」は、古代日本の口承の世界を裏付ける決定的な証拠として、『古事記』序から読み取れたものである。天皇の直授した「古語」を、阿礼の口に残し、なお今に伝えている『古事記』の価値が二重に保証されることは、改めて言うまでもないだろう。『古事記』の本質は、まさにこうして「古語」を保持してきたところにあった。そこで、いわば和銅五年という『古事記』の位置づけは、宣長によると、根本的にはその成立の発端として表れている天武天皇の時点に帰されるのである。

天武天皇との直接的かかわりについて、宣長は用意周到である。最初の天武天皇の勅にある「帝紀及本辞」（『古事記』上巻・序、21）について、

> 川嶋皇子等の修撰のところに、上古諸事とあるは、正しくこれなり、然るに今は旧事といはずして、本辞旧辞と云る、辞字に眼をつけて、天皇の此事おもほしめし立し大御意は、もはら古語に在けることをさとるべし、（『古事記伝』二之巻、9・71）

と注する。「上古諸事」も正しくは「事」ではなく「辞」だとするのは、天武紀十年三月に、川嶋皇子らに「帝紀及び上古の諸事を記し定めしめたまふ」（『日本書紀』巻二九、下・446）とある記事を指している。この件を『古事記』序に対応させて読むことが通説ではあるが、その必然性は認めがたい。しかし、宣長が「本辞」「旧辞」の「辞」の字にこだわっていること、そしてそれを全て天武天皇の言語への意識として還元しようとすることはよく分かる。

こうして「阿礼がよみならひつるも、漢文の旧記に本づくとは云ども、語のふりを、此間の古語にかへして、口に唱へこゝろみしめ賜へるものぞ」（『古事記伝』一之巻・訓法の事、9・31）とあるところに、宣長の理解は集約されている。

宣長からすれば、元明天皇の命を果たして最終的に『古事記』を完成させた安万侶は、阿礼の口から「古語」に誦み直したのをただ聴いて文字に書き移した存在であったに過ぎない。安万侶の撰録作業について、「たゞ四箇月余にして業を終たる、いとかく速なりしも、たゞかの阿礼が語のまゝを録せるのみにして、新為を加ふることのなかりしがゆゑなるべし」（『古事記伝』二之巻、9・80）としたのも、この意味では了解される。

では、『古事記』序の後半に細かく記される、安万侶の編纂過程における苦心は何だったのだろうか。

> 上古の時は、言と意と並に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於ては即ち難し。……是を以て、今、或るは一句の中に、音と訓とを交へ用ゐつ。或るは一事の内に、全く訓を以て録しつ。（『古事記』上巻・序、24-25）

www.kci.go.kr

> 此文を以見れば、阿礼が誦める語のいと古かりけむほど知られて貴し、……此の文をよく味ひて、撰者のいかで上代の意言を違へじ誤らじと、勤しみ慎まれけるほどをおしはかるべく、はた書紀などの如漢文をいたくかざりたるは、上代の意言に疎かるべきことをもさとりつべし、（『古事記伝』二之巻、9・75-76）

ここで安万侶は『古事記』撰録にあたって漢字で書き表すときの困難さを述べているが、宣長によると、そのことはむしろ「阿礼が誦める語」の古さを裏付けるものとなる。また別の箇所には、「全く仮字書の如くにもせまほしく思はれけむ、撰者の本意しられたり」（『古事記伝』一之巻・文体の事、9・19）とあり、もしできるならば全文仮字書にしたかったのが安万侶の本意であったと解する。

結果的に、安万侶は、訓主体の漢文表記を選択した。いわゆる「変体漢文体」で書かれている『古事記』本文をめぐって、『古事記』研究史においては「古事記はよめるか」[8]という根本的な懐疑が問い続けられてきたのである。そのなかで、宣長は実際に『古事記』を「よんだ」。宣長による『訂正古訓古事記』及び『古事記伝』がそれである。

## 3．文字無き世界の「言」と「心」

さて、『古事記』は本文と異なって、序だけは正格の漢文体で書かれている。しかも、序以外には『古事記』成立を証明するものがないという事情から、『古事記』は疑わざるを得なった。現在にまで続く、古事記偽作説の発端を切り開いた張本人は、真淵であった。1768年、真淵は、宣長宛の書簡の中で、

> 惣て古事記は序文を以て、安万呂之記とすれとも、本文の文体を思ふに和銅なとよりもいと古かるへし、序は恐らくは奈良朝の人之追て書し物かとおほゆ、……其此古事記の序も作りしか、これ等の事、後来よく考給へ、此序なくはいと前代の物と見ゆる也、（『県居書簡』23・137）[9]

と、序は恐らく奈良時代のものではないかと推定している。真淵の疑問はやはり本文と序との「文体」の差異に起因するものであった。真淵はその表記をもって、次のように、『古事記』を特権的に位置づけることを可能にした人物でもあった。

---

8) 参照、亀井孝（1957）「古事記はよめるか―散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の問題」『亀井孝著作集4　日本語のすがたとこころ（2）』吉川弘文館、1985。

9) 引用は『賀茂真淵全集』続群書類従完成会により巻数・頁数を示す。

www.kci.go.kr

古史ヲ引ニ古叟紀ヲ先トシ、日本紀ヲ次トス、日本紀ハ上古ノ数書ヲ選定セラレタレド、儒士紀朝臣清人専コレニ与テ、漢文ニ泥タレハ、上古ノ事実ニ違ルモ多シ、古事紀ハ上古質直ノ国史也、且国語ヲ専トシタレハ、上古風ヲ見、古語ヲ知、古文ヲ察スルニ及モノ無レハ也、（『延喜式祝詞解』序附記、7・11）

歴史的にもずっと尊重されてきた『日本書紀』を、漢文的潤色に負われているとしながら、「古風」「古語」「古文」という視点により、『古事記』をその上に置く。ここに、近世に初めて『日本書紀』と『古事記』との価値の転倒が起こったのである。

宣長の『古事記』重視の態度もまた、「古語」を主とする表記上の差異こそが、『日本書紀』に対する『古事記』の質的な優位性を根拠づけるものだとする理解からであった。それをもとに、彼は「古事記を本文とし。日本紀を註解として見るべき事也」（『石上私淑言』巻一、2・92）とまで言ったのである。

ただし、『古事記』序に関しては、宣長はそこに「漢籍の趣」は認めても、序そのものを偽撰とする説には加担しなかった。

此序は、本文とはいたく異にして、すべて漢籍の趣を以て、其文章をいみしくかざりて書り、……漢のおしなべての例なるに依れるなり、……本文のさまと甚く異なるをもて、序は安万侶の作るにあらず、後人のしわざなりといふ人もあれど、其は中々にくはしからぬひがこゝろえなり、すべてのさまをよく考るに、後に他人の偽り書る物にはあらず、決く安万侶朝臣の作るなり、（『古事記伝』二之巻、9・65）

今此序を註するに、たゞ文章のかざりのみに書るところは、たゞ一わたり解釈て、委曲はいはず、其はみな漢ことにして、要なければなり、かくて末に至りて、記の起りを述べ、書ざまをことわりなどせる処は、必よく意得おくべきことどもなれば、委曲に云べし、（『古事記伝』二之巻、9・66）

最初から、序はあくまで漢文のしきたりに従って書いた「文章のかざり」に過ぎないとしつつも、最後まで、偽作説に対しては強く否認している。宣長は真淵にように、序を本文と分離して捨ててしまう、わりと簡単な方法をあえて採らなかったのである。ある意味、真淵説を彼なりに受けとめ、師説を乗り越えていった。その序へのこだわりは、今まで述べてきたように、口承の世界に欠かせない問題として、序を『古事記』成立にかかわる唯一の手がかりと見なしたからであろう。

そのことが発展して、後の折口信夫になると、『古事記』は「語部の新台本と言ふことが出来よう」[10]と言われたりもする。津田左右吉が『神代史の新しい研究』「緒論一神代史の性質と、それが作られた時代」において、「宣長が古事記伝をかいてから古事

10) 折口信夫（1935）「口承文学と文書文学と」『折口信夫全集5』中央公論社、1995。p.181

www.kci.go.kr

記の由来について一種の僻見が世に行はれてゐる」[11]といった強い批判から始めたのは、この問題の大きさを物語ることでもある。

因みに、古事記偽作説は少なくとも近世期には顧みられることはなかった。ここで成立論に立ち入る余裕はないが[12]、再び偽作をめぐる議論が登場するのは1924年、中沢見明の「古事記は偽書か」が出てからであり、この論文は1929年に『古事記論』として刊行される。その「自序」にも、「たゞ一つ腑に落ちなかつたことは翁（＝本居宣長）が古事記を以て神代からの口伝をそのまゝ筆録したものだと断定された理由の薄弱な点であつた」[13]という指摘がなされている。

口承の世界として文字無き古代日本をとらえようとした宣長の立場は、「言を主とし。文字を僕従として見る」（『石上私淑言』巻一、2・114）、すなわち漢字を日本語表記のための借りものと見る、思想的な基盤から考えられる。村井紀の指摘する通り[14]、それは国学が漢字の抑圧への抵抗の体系としてその性格を得ていく過程を辿ることになるだろう。

> 本朝ハ神国ナリ。故ニ史籍モ公事モ神ヲ先ニシ人ヲ後ニセスト云事ナシ。上古ニハ唯神道ノミニテ天下ヲ治メ給ヘリ。然レトモ淳朴ナル上ニ文字ナカリケレハ、只口ツカラ伝ヘタルマヽニテ、神道トテ儒典仏書ナトノ如ク説オカレタル事ナシ。（『万葉代匠記』惣釈、1・158）[15]

たとえば、このような契沖の「神国」を語る言説が以後の国学者を拘束したのは自明であろうが、だからといって、これをもって契沖のナショナリズムを説くことは慎重を期する。真言僧としての契沖にとっては尤もな論理であり、文字をもたないことが「神国」や「神道」の世界の価値を損なうという認識も見られない。だが、真淵は、文字（漢字）がもたされた時点から「漢意」に負われていく世界を排撃するのである。元来の素直で雅やかな「御国」の精神を失ったのは、全て中国から伝来された文物の悪影響として見なされる。それが宣長に至ると、文字そのものが「さかしら」として徹底的に否定され、文字無しに成り立っていた世界こそが「皇国」の証となる[16]。

---

11) 津田左右吉（1913）『津田左右吉全集　別巻1　神代史の新しい研究／古事記及び日本書紀の新研究』岩波書店、1963-89。p.21

12) 参照、山田孝雄（1935）『古事記序文講義』国幣中社、梅沢伊勢三（1988）『古事記と日本書紀の成立』吉川弘文館、及び同（1988）『古事記と日本書紀の検証』吉川弘文館、西郷信綱（1973）『古事記研究』未来社など。

13) 中沢見明（1929）『古事記論』雄山閣。p.3

14) 参照、村井紀（1989）『文字の抑圧―国学イデオロギーの成立』青弓社、同（1990・8）「文学と歴史の読み方について―安吾・折口・宣長」『現代思想』18・8、及び同（1992・4）「都市の漢意」『現代思想』20・4など。

15) 引用は『契沖全集』岩波書店により巻数・頁数を示す。

16) とくに真淵の『国意考』や、宣長の『石上私淑言』巻二以降に主に展開される説で、『古事記雑

www.kci.go.kr

近年、宣長のこの側面を頻繁に取り上げて最も積極的に日本ナショナリズムを論じているのは、子安宣邦である。子安宣邦の批判によると[17]、このことは「美しき「口誦のエクリチュール」」と表現され、宣長によって「選択」された『古事記』とは日本の純粋固有の言語を保持してきた世界という理念とともに成立した仮想のテキストであったとされる。

しかしながら、文字の向こうにある世界を、他でもない漢字表記からなる『古事記』に求めた以上、その発想が最初から矛盾であることは宣長自身が誰よりも自覚していたはずである。その無理を承知した上で宣長がそれでも実現しようとした『古事記』注釈の意味を問いつめない限り、正当な宣長理解ところか、言ってみれば、それこそ単なる「宣長言説」が繰り返されるだけではないか。したがって、『古事記伝』の本文そのものを読むことから始めるべきであるが、本稿はこうした立場を確認したところで結びをつけねばならない。

## 4．「事」として実現する世界

本稿では主に『古事記伝』における『古事記』序の注解を見てきただけに、それを踏まえた、ひとまずの結論を示すほかない。ここで最初の「言」＝「事」＝「心」の図式を振り返りながら、宣長の注釈という問題に進めていきたい。

はじめに引いた、『古事記伝』の文に照応する『宇比山踏』の文の全貌は次のようにあり、ここに宣長が教えられたとする師説とは、下記の『にひまなび』に由来することと考えられる。

> わが師大人の古学のをしへ、専こゝにあり、其説に、古の道をしらんとならば、まづいにしへの歌を学びて、古風の歌をよみ、次に古の文を学びて、古ぶりの文をつくりて、古言をよく知て、古事記日本紀をよくよむべし、古言をしらでは、古意はしられず、古意をしらでは、古の道は知がたかるべし、といふこゝろばへを、つねづねいひて、教へられたる、此教へ迂遠きやうなれども、然らず、その故は、まづ大かた人は、言と事と心と、そのさま大抵相かなひて、似たる物にて、（『宇比山踏』1・17）
>
> 天の下には事多かれど、心とことばの外なし、此ふたつをよく知て後こそ、上つ代々の人の上をもよくしらべて、古き史をもその言を誤らず、その意をさとりつへけれ、……なまじひにから文を見て、こゝの神代の事をいはんとする、さかしら人多し、よりてそのいふ事虚理に

考』や『直毘霊』のそれとも相通じる。

17) 子安宣邦（1972）の第三章「美しき「口誦のエクリチュール」―『古事記伝』への道・三」、同（2006）の第五講「古えの真実のテキスト―宣長における『古事記』の選択」、及び第六講「先ず「やまとことば」が存在した―「漢文のふり」から「古語のふり」へ」、同（2007）の第二章「「日本語」の理念とその創出―宣長『古事記伝』の贈り物」などを参照。

www.kci.go.kr

して、皇朝の古への道にかなへるは惣てなし、……かく皇朝の古へを尽して後に、神代の事をばうかゞひつべし、さてこそ天地に合ひて御代を治めませし、古への神皇の道をも知得べきなれ、（『にひまなび』19・205-206）

宣長の思想の多くが直接的には真淵のそれに影響されたことは、改めて指摘するまでもない。留意したいのは、世界の基底に位置しているものを「心」と「言」のみとする真淵の言明に対し、宣長の挙げた「言と事と心」には「事」という概念が含まれている点である[18]。つまり、三位一体の図式は「言」を成立せしめた「事」があるからこそ意味をもつのである。換言すれば、宣長にとって『古事記』の一語一語を注釈することは、そこにある古代の「言」のままの世界を再現する努力に止まらず、実在した具体的な「事」を追認していく作業でもあった。しかも、その実際とは、あった古語の「発見」ではなく、まさにあるべき古語の「創出」というべきものであった[19]。

宣長の言う注釈は、語釈ではなかった。むしろ、宣長は「語釈は緊要にあらず」（『宇比山踏』1・6）とし、その補注には、

語釈とは、もろもろの言の、然云本の意を考へて、釈といふ、たとへば天といふはいかなること、地といふはいかなることと、釈くたぐひ也、こは学者の、たれもまづしらまほしがることなれども、これにさのみ深く心をもちふべきにはあらず、こは大かたよき考へは出来がたきものにて、まづはいかなることとも、しりがたきわざなるが、しひてしらでも、事かくことなく、しりてもさのみ益なし、されば諸の言は、その然云本の意を考んよりは、古人の用ひたる所をよく考へて、云々の言は、云々の意に用ひたりといふことを、よく明らめ知るを、要とすべし、（『宇比山踏』1・16）

とある。宣長の作業は、言葉の意味を考えて世界を解釈する、従来の注釈の形に対応するものだったのである。「漢籍心を清く洗ひ去て、よく思へば、天地はたゞ天地、男女はたゞ男女、水火はたゞ水火にて、おのおのその性質情状はあれども、そはみな神の御所為にして、然るゆゑのことわりは、いともいとも奇霊く微妙なる物にしあれば、さらに人のよく測知べききはにあらず、」（『古事記伝』一之巻・書紀の論ひ、9・10）という有名な発言は、単に意味を問うことを放棄したとか、宣長の注釈の貧弱さを表わすこととかではなく、こうした趣旨から了解されるべきであろう。

要するに、宣長の見るには、「事」によって実体化される世界の意味が『古事記』に

18) この点に注目したものとして、野崎守英（1972）『本居宣長の世界』塙書房を挙げておく。なお、萱沼紀子（1980・4）「真淵と宣長の対象と方法―和歌」『国文学解釈と鑑賞』45・4も同様の指摘はしているが、結論的にそれを宣長の散文的考えの表現とする。

19) 神野志隆光（1999）の第一章「本居宣長『古事記伝』をめぐって」。後の同（2007）の第十章「「古語」世界の創出―『古事記伝』」を合わせて参照。

www.kci.go.kr

凝集されていた。その意味において『古事記』は世界の原典であったと言える。『古事記伝』の「伝」も、元来「経」に対して「伝」というのであり、まさにこうした意味を担うものとして考えられる。さらに言えば、「伝」において原典との齟齬や拡大解釈などは最初から問題にならないのである。

## おわりに

最後に、小林の宣長批評に話を戻したい。小林は、宣長の『古事記伝』を「日本人の日本語についての最初の反省」（『本居宣長補記』Ⅰ、2・280）と意味づけていた。その宣長の言語認識に触発され、彼は自分の抱えていた現代の言語共同体の生活に直ちにそれを投影する。少なくとも言語論として宣長を読み通そうとした側面は積極的に評価されてもよさそうである。端的に言えば、小林は自分と宣長、宣長と安万侶、その構図のなかで「肉声」という用語を比喩的に使っていたに過ぎないが、しかし、宣長にとっては文字通りの「肉声」としてとらえるべきものが確かに『古事記』にあったのである。

宣長が『古事記伝』において『古事記』という原典を発見したように、小林の言う批評の対象との「合体」によって、彼は果たして宣長という原典を得たのか。小林研究者側の答えは概ね懐疑的である。小林批評の限界については「巨大なトートロジー」とか「出口のない円球」とか「閉じた円環の構造」などと呼ばれたりして、他者性を認めない読みや世界認識の欠如として指摘されている[20]。ただ、本稿の趣旨はこのような小林批判に今さら加担することではない。

問題は、こういった小林への批判はほぼ同様の形で、常に宣長批判にも向けられるという点にある。あえて小林をもち込んで宣長を論じてきた意義はそこにある。小林に対する評価の低さとは別に、近代日本の宣長言説に影響を与え続けてきた小林の宣長論は、今なお宣長に対する先入観として残っている。だが、強い自己意識の結果、自己を肥大化することで出口をもたない循環の構造に陥ってしまったのは、あくまで小林であって、宣長には当てはまらない。『古事記伝』における自己完結する世界は、宣長の意識構造の問題として遡及的に求めることはできず、『古事記』という原典から実現される世界として意味づけねばならないのである。

---

20) 宇波彰（1979・3）「巨大なトートロジー」『現代思想』7・3、野崎守英（1982）『宣長と小林秀雄』名著刊行会、前田愛（1983）『近代日本の文学空間―歴史・ことば・状況』新曜社。

www.kci.go.kr

# 【参考文献】

テキスト

· 『古事記』神野志隆光 · 山口佳紀校注、新編日本古典文学全集1、小学館、1997。
· 『日本書紀 上 · 下』坂本太郎他校注、日本古典文学大系67 · 68、岩波書店、1965-68。
· 『契沖全集』岩波書店、1973-75。
· 『賀茂真淵全集』続群書類従完成会、1977-92。
· 『本居宣長全集』大野晋 · 大久保正校訂、筑摩書房、1968-93。
· 『小林秀雄全作品27 本居宣長 上 · 下』新潮社、2004。

· 折口信夫（1935）「口承文学と文書文学と」『折口信夫全集5』中央公論社、1995。p.181
· 神野志隆光（1999）『古事記と日本書紀』講談社。pp.11-32
· ＿＿＿＿＿（2007）『漢字テキストとしての古事記』東京大学出版社。pp.198-222
· 子安宣邦（1992）『本居宣長』岩波書店、2001。pp.53-82
· ＿＿＿＿（2006）『宣長学講義』岩波書店。pp.95-130
· ＿＿＿＿（2007）『日本ナショナリズムの解読』白沢社。pp.37-57
· 津田左右吉（1913）『津田左右吉全集　別巻1　神代史の新しい研究／古事記及び日本書紀の新研究』岩波書店、1963-89。p.21
· 中沢見明（1929）『古事記論』雄山閣。p.3

www.kci.go.kr

## 要　旨

本稿は、本居宣長の言語認識に焦点を当てていた小林秀雄の宣長批評を一つの手がかりにし、宣長が彼の半生をささげた『古事記』注釈の意味を考えようとしたものである。宣長にとって『古事記』は、文字をもたなかった古代日本の、あるべき「古語」を見出し得る第一の文献であった。『古事記』序を証明資料として用いたことや、注釈の対象として『日本書紀』でなく、『古事記』を選んだことなどは、こういった認識に深くかかわっている。ただし、以上のような議論だけでは、『古事記伝』そのものに即した宣長理解あるいは宣長批判にはならず、そこで本稿は『古事記伝』のテキスト分析の重要性を問題提起として確認したのである。ひとまずの結論として、宣長の『古事記』注釈の営みは「（古）言」探しという方法的自覚と相まって「（古）事」を求めていたところに意味があると指摘し、だからこそ『古事記伝』において『古事記』は世界の原典として成り得たのだろうという今後の展望を示した。

キーワード：本居宣長、小林秀雄、古事記、古事記伝、言語観、世界観

투　　고：2011. 5. 31
1차 심사：2011. 6. 11
2차 심사：2011. 6. 25

www.kci.go.kr